強さ

中　一

私には以前ひいおばあちゃんがいました。そしてその右手は、指が二本しかありませんでした。原因は、若い頃に勤めていた工場のプレス機という大型の機械で、人差し指・中指・薬指の三本を誤って挟んでしまったことだそうです。三本の指はなくなり、大手術により、かろうじて残った親指と小指の接合が成功したものの、痛みとショックにより、何年も立ち直ることができずにいたと聞きました。私だったら、それはとても耐え難い出来事だと思いました。当たり前にあった手の指を、いきなり失ったという現実を受け入れるのに計り知れない時間が必要だったと思います。

その数年後、ひいおばあちゃんにとっての初めての孫、つまりは私の母が生まれます。その当時、まだひいおばあちゃんは自分の指に痛みが残り、不自由だったにもかかわらず孫である私の母の世話を精一杯してくれたと母が言っていました。

当初、指が二本しかないことに対して、何も事情を知らない周囲の人たちからは、好奇の目で見られ、ときには指を差されて笑われてそれがとても辛くて悲しくて、ハンカチなどで手を隠しながら生きてきたのだと聞かせてくれたこともありました。その場にいなかった私でさえとても痛かっただろうと分かるのに、何故周囲はそれを笑うのか、私はとても悲しく思いました。同時に「偏見」について考えるようになりました。人が勝手に決めつけた「普通」、それに少しでもそぐわなければ、世間から異常とされ、ときに嘲笑われ、ときに恐れられる。そのことに強く理不尽さを感じます。けれど、ひいおばあちゃんが「偏見」に負けることなく生きることができたのは、家族の支えがあったからだと話してくれたこともあります。私の母もひいおばあちゃんのその手を特別だ、変だと思ったことは一度もないそうです。むしろ頭を撫で、抱きしめてくれる手が好きだったと言います。私が生まれたときも勿論、ひいおばあちゃんの指はありませんでしたが、私にもそれが「普通」で、変だ、異常だと感じることは一度だってありませんでした。

そんな優しくて温かいひいおばあちゃんは、今年の夏、天国へ旅立ちました。たくさんの思い出をこの世に残して。それはとても悲しくて、大きな喪失感があります。けれどひいおばあちゃんならば、皆が落ち込んだままでいるのはきっと嫌だろうと思い、できる限り笑っていようと思いました。ひいおばあちゃんが亡くなったと聞き、「お線香をあげたい。」と言ってくれる人がたくさんいて、ひいおばあちゃんは、本当に優しい性格だったのだと感動しました。ひいおばあちゃんは、とても優しく、そしてとても「強い人」でした。そして私もひいおばあちゃんのように、強く生きていきたいと思います。